

与論島ホーチサアクラのシュニグ —天神と祖神の間で—

源 園生（所属：日本民俗学会・沖縄文化協会）

シュニグ^①は1731年編纂の『琉球国由来記』伊平屋島の年中祭祀7月の項に「シノゴ折目」と記され、沖縄本島北部および周辺離島を中心に行われている農耕儀礼である。「災厄祓え」と「五穀豊穡」の祈願が主と考えられているが、祭りの様式は祭祀集団ごとに異なっている。

先行研究では、国頭半島の「シヌグ」を記録した島袋源七『山原の土俗』1929（郷土研究社）が初で、与論島のシュニグは1959年に九学会連合から訪れた大山彦一により、『南西諸島の家族制度の研究』1960（関書院）の中で192頁にわたり報告されている。また、小野重朗は『奄美民俗文化の研究』1982（法政大学出版局）において、「シヌグ」と「ウンジャミ」の対比、および与論島と安田のシヌグの対比から、「シヌグ＝山の他界神 男性社会（年齢階梯組織）」「ウンジャミ＝海 ニレーの神 女性社会（女神役組織）」と論じ、その後の研究に示唆を与えた。

本発表では、祭りの当事者における歴史認識をともなった心意に注目し、「天神」と「祖神」を視座にシュニグの神観念を検証していく。

祭りの起源は不明であるものの、沖永良部島の島伊名重は、14世紀末頃誕生の世の主の分娩時にシュニグの禁忌から宿が借りられなかったとの伝承を記す。さらに、神仏判然令の下達によるシュニグ禁止に対し、「この唯一絶対の神の大祭も全く跡を絶つに至れり」と述べている^②。

与論島では、明治3年に神仏判然令により廃止に至ったものの、その10数年後から、未曾有の暴風、干ばつ、疫病、火事が相次いで繰り返し起こり、シュニグ祭りを行っていない祟りであるとの島民の畏怖により、明治23年に復活された経緯がある。このことから、シュニグの神は、本来、創世神であり、宇宙・自然を司る神であったといえよう。一方、斎舎「サアクラ」と「神道（カミミチ）」と「構成員」をたどれば、隆起珊瑚礁から成る与論島のシマ建てがわかるとされている。1970年頃までは、島内で半数の世帯が、死・血・争・火・汚などの禁忌を遵守し、同族を中心とする20余の祭祀集団「サアクラ」^③ごとに、旧暦7月16日から2～4日間、祭りを行っていた。サアクラに集まる人々は、たとえ今どこに住んでいようと、島に上陸した始祖が初めて居住したのがサアクラの建つこの「根地（ニイジ）」の地であったと信じている。

ホーチサアクラは、与論島のシュニグ祭祀集団の中でもひととき祖先崇拝に篤い。このサアクラは尚真王代末期に、21歳で首里から渡島して「世の主」となったと伝わる幼名花城真三郎・又吉按司を「祖」とする。又吉按司は、国の重要無形民俗文化財「与論十五夜踊」の創始者と伝わり、また、『おもろさうし』で謡われる与論島の活況も、その時代であったかと推測される。すなわち「天神」であるシュニグ神と、具体名が知られている「祖神」との調和がこのサアクラにおいて顕著であり、その変遷の過程をふくめて考察していく。

①子音「s」「n」「g」を含んで「シニグ」「シヌグ」「シニグイ」「シニグ」などと呼称される。ホーチサアクラでは「シュニグ」と呼称していることから、本稿における基本呼称とする。

②「維新前に於ける本島城籠祭の内容」『沖永良部島郷土史資料』1968 鹿児島県大島郡和泊町

③祭の前日に建てる 壁や床のない斎舎および祭祀集団を地名を冠して「〇〇サアクラ」と呼ぶ。